

歌の国ならぬ近代オペラ

文 田辺とおる

《オペラ劇場あらかわパイロイト》公演監督

〜アンジェーリカとジャンニ〜

東京国際芸術協会のオペラシリーズ、TIAAオペラでは久しぶりにプッチーニを取り上げます。一幕物の二作品、《修道女アンジェーリカ》と《ジャンニ・スキッキ》。これは《三部作》(Trifone)と名付けられたセットの、真ん中と最後の作品です。トリッテイコは英語のトリブテイクに对照するイタリア語。教会祭壇の中央と観音開きの扉に描かれている三連画のことですね。

今回上演しない最初の作品は《外套》という港湾労働者の殺人劇。プッチーニは三作セットで上演することに非常にこだわったのですが、流石に一時間物が三つとなるとワーグナーオペラ並の上演時間ですから、イタリアオペラとしては破格のサイズになってしまい、必要な歌手も膨大な数に上るので、独立させて都合よく組み合わせるスタイルが定着しています。

一八五八年生まれのプッチーニは、二十五歳で《妖精ヴィツリ》(一八八四年)を発表してオペラ作曲家としてデビュー以来、概ね四年に一本の割で新作を世に問うて大作曲家への階段を上ります。「リコルディ王国」と言われるほど音楽界に影響力のあつた出版社を率いるジューリオ・リコルディは「プッチーニこそヴェルディの後継者」と彼を庇護しました。次作の《エドガール》は不発に終わったものの、第三作《マノン・レスコー》で大成功。以後、台本作家のイツ

リカとジャココーザ二人と組んだチームは「黄金のトリオ」と称えられて、《ラ・ボエーム》《トスカ》《蝶々夫人》と、今日なお世界中の劇場で喝采される名作を生み出します。《蝶々夫人》は関係者の確信に反してミラノ、スカラ座での初演は不評でしたが、長すぎ第二幕を刈り込むなどの手を入れた改訂版が三ヶ月後のブレーシヤ上演で成功しました。一九〇四年、プッチーニ四十五歳。

人気作家となった彼は豊かな生活を手に入れたうえ、自作が上演される各国から招待されるなど、優雅な暮らしを楽しみます。しかしジャココーザの死や、妻の嫉妬による女中の自殺と裁判沙汰などで消沈した彼の筆は進まず、後には第一次大戦の影響もあつて、一九一〇年に《西部の娘》、一七年に《つばめ》とペースが落ち、評判も程々でした。今日この両作品は「スランプに見舞われた過渡期」と位置付けられています。

《三部作》は、この長いスランプを脱して再びプッチーニの手から名作が生まれたという、記念碑的な作品です。終戦直後の一九一八年十二月十四日、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で、豪華な装置と並み居る名歌手を揃えた贅沢な初演を迎えました。プッチーニ自身は、戦争で混乱した交通事情のために、はじめて自作初演に欠席しましたが公演は大成功。ことに《ジャンニ・スキッキ》の喝采は凄まじく、カーテンコールは四十回以上に及んだと記録されています。翌一月、ローマでのイタリア初演には

作曲家も陪席して、同様の成功を目の当たりにしました。

ストーリーが連続しない三作の一幕物オペラをセットにする、という発想は大変に珍しいものです。プッチーニの狙いは、イタリア古典文学のダンテ作「神曲」の地獄篇・煉獄篇・天国篇を彷彿させる組み合わせにありました。《外套》は愛欲と嫉妬が交錯した薄気味悪い悲劇。《修道女アンジェーリカ》は不義の子を産んで上流社会からはみ出た修道女の自殺と神の救済。《ジャンニ・スキッキ》は遺産の取り合いに奔走する親戚連中を乾いたユーモアで描写したプッチーニ唯一の喜劇で、題材は「神曲」地獄篇の第三十曲にある遺書改竄者ジャンニ・スキッキの話。皮肉と機知を織り交せて人心の機微を突き、艶と欲の対照を浮き彫りにした台本を、フィレンツェが舞台という理由以上に南国的熱情を湛えた音楽と、巧みに色分けされたオーケストラレーションが彩ります。ほどなくこの作品には「ファルスタッフ(ヴェルディ最後のオペラ)以後のイタリアに生まれた最高の喜劇オペラ」という評価が定まりました。

《ジャンニ・スキッキ》の成功が三作で一歩先んじたものの、一九二〇年のウィーン初演(ドイツ語初演)で《修道女アンジェーリカ》も大成功を収めます。名ソプラノ、ロッテ・レーマンの功績になるものです。凄惨

な殺人劇とスピーディーなコメディに挟まれて動中の静を為すこの作品は、教会の窓から射し込む一条の光のように控えめな色合いで「トスカ」ナ地方の憂鬱」と言われるメラニコリーを綴る中、ドラマティックな公爵夫人・はしゃいだ修道女たち・アンジェーリカの情熱的な「いつものプッチーニのプリマドンナ」などが起伏を与えています。初演前に、姉イジーニアが勤める修道院でプッチーニがピアノの弾き語り作品を紹介したところ、アンジェーリカの悲劇的運命は修道女たちを慟哭させました。

それにしてもこの《三部作》、歌の国イタリアならではの近代的名曲といえるでしょう。大胆な和声を思い切って使いながら、得意の旋律性と絡ませていく名匠の技が凝縮されています。部分的に取り出してピアノで弾いてみると「いわゆる現代曲」的な不協和音が連続しているのに、フル編成の演奏を聞くと見事にブレンドされている。時あたかも、リヒャルト・シュトラウス、ヤナーチェク、ストラヴィンスキー、シェーンベルクなどの二十世紀前半をリードする作曲家たちが覇を競って近代オペラを書いていました。実はプッチーニもこの列に連なる近代の作曲家なのだということは、あまりにも旋律が美しいので見逃されがちですが、イタリアオペラとて他国の音楽展開よりも遅れていた訳ではないという証左になりましょう。